

# アイデンティティ形成の場としての学校

——女子高校生の交友関係に注目して——

水野 進

はじめに

いじめ・自殺や不登校問題がクローズアップされた1980年代後半以降、それと連動したかたちで学校が生徒個人に対しても「居場所」としての機能についても様々な角度から考察がおこなわれてきた。しかしそれらは、概して上記の問題を解決するための政策的ないしはケア的発想に貫かれていたために、その主流は生徒にいかに関心を与えるための空間を学校の内外に創出するかという課題に焦点化したものであったといえよう。換言すれば、緊急避難的な場所としての空間＝居場所をいかに確保するかが最重要な課題であったといえるだろう<sup>(1)</sup>。それゆえ、そこではそれらの問題が顕在化していない、いわゆる「日常空間」としての多くの学校空間が、生徒個人にとってどのように現象しているのかが十分問われることはなかった。つまり学校空間は、生徒個人から、いかなる意味づけを与えられているのかという問題は等閑視されてきたといってよかろう。この問題は、学校の存在意義という重要な問題へもつながるだけになおざりにできない面を含んでいるものと考えられる。そこで本稿では、この問題を主要テーマにして考察を進めることにする。

次に本稿の視点をあきらかにしておこう。先の問題を本稿では「アイデンティティ」と「女子高校生の交友関係」という角度から考察する。この2つの概念をここで用いた理由とそれらの関係は以下の通りである。

「アイデンティティ」という概念をここで用いるのも、「居場所」という概念が直ちに誰にとって、いかなる意味でという問いを誘発するようにその不明瞭さが否めないからである。それに対して「アイデンティティ」は、すぐれて自己にかかわる概念であり、しかもそれが日本語で「自己同一性」と、しばしば翻訳されるように対象（他者）と自己との関係概念であることがあきらかだからである。つまりアイデンティティという概念には当初から、他者を經由して自己を確認するという意味での他者性が刻印されているからである。このことは、実は後者の「交友関係」という概念とも密接に関係する。というのも後述するように、少なくとも本稿で対象とする高校では「交友関係」が生徒たちの学校での楽しみのトップに位置づいているからである。つまり、ここで生徒個人々は、友人という対象を通して自らのアイデンティティ形成をおこない、さらに学校空間へのそれもおこなっていると想定されうるからである。さらにこの際、「女子高校生の」という限定詞をつけたのは「交友関係」に関する先行研究を意識したためである。というのも学校、とりわけ女子高校では生徒たちのサブカルチャーにジェンダー・バイアスが顕著に観察されるという指摘があるからである（宮崎 1993, 上間 2002）。つまりこれらの研究は、女子生徒の場合、サブカルチャーにおけるジェンダー・バイアスがそのアイデンティティ形成途上で顕在的なかたちで作用していることを示唆しているのである。そこで本稿では以後、ジェンダー・バイアスをセクシャリティと連動したかたちで個人々に性別規範（この規範内容はそれが発現する状況や場によって異なる）を植えつけようとする力と定義して論を進めたい。

ところで上記の先行研究に問題がないわけではない。というのも第1に後に宮崎自身が指摘しているように、これらの研究では観察された、いくつかの学校内女子グループがそれぞれ類型化されたために、そのそれぞれがいわば「一枚岩」としての集団として扱われてしまったこと（宮崎 1998）、換言すればそこで観察されたのはむしろグループとしての集団的アイデンティティであること、それゆえにその内部の個人々の葛藤や矛盾

の相が見えにくくなり、グループ内の変動過程を十分説明できないこと、第2に、第1点とも関わって、両研究とも「女（生徒）はつくられる」という視点よりも、むしろサブカルチャー内部でのジェンダー・バイアスを所与のものとして、それらがいかなるかたちで女生徒に配分され、グループの分化を導くのかという視点に特化していることがあげられる。この結果、たとえば宮崎（1993）では却って「品の良さ」や「貞淑さ」を基調とする、女性に対する旧来の性別規範からの差異化の程度問題に問題が矮小化され、その属する集団の性別規範に居心地の悪さを感じたり、疑問を呈したりする個々の女生徒の動きが十分すくい取れない結果に終わっているといえるだろう。

そこで本稿では女子高校生が学校という場で、交友関係を通していかなるアイデンティティ形成をおこなっているのかを、ジェンダー・バイアスとの関連から追求することを目的とする。つまり女子高校生が、学校という場でアイデンティティ形成を行う場合、ジェンダー・バイアスがどのように介在し、またその力との同調・葛藤過程のなかでどのようなアイデンティティが生成されてくるのかを事例研究をもとに考察しようというのである。このあり方こそが先に述べた、生徒個々人の学校空間への意味付与のあり方を規定する1つの有力な源泉になるとともに、その所属する友人グループの変動をグループ内的な視点から説明するモデルともなりうると考えられるからである。それゆえ先の同調・葛藤過程を生徒個々人の意味付与との関連から分析することを意図するため、本稿では主として解釈的アプローチを採用することにする。ところでここで重要なのは、アイデンティティは決して固定したものではなく、生成変化するという視点である。従来の「アイデンティティの複数性」という考え方<sup>(2)</sup>にはこの生成変化という視点が弱かっただけに、ともするとアイデンティティが静態的なものとしてとらえられ、その集合の全体を主体がいかに管理するかという問題のみが前面に押し出されがちであった。しかし上記の視点に立つとき、生徒個々人が、ある状況下でいかなる資源を動員して自らのアイデンティテ

イ形成を行っているのかという問題構成が可能になると考えられる。実に「アイデンティティは（中略）」実際には、存在よりも生成変化のプロセスのなかで、歴史・言語・文化の資源を使う問題についてのこと」（Hall 訳書 2001, 12頁）なのである。

## 1 調査対象校の特性と調査方法

本稿で扱うデータは、主に200a年4月～200d年3月の3年間にわたって大都市圏のある夜間定時制高校（共学）（以下A高校と呼ぶ）におけるフィールドワークに基づいて蒐集されたものである。つぎに調査高校の特性を簡単に記しておこう。この高校の200a年現在の生徒在籍者数は約100名である。現在夜間定時制高校一般がそうであるように、ここの入学者も全日制高校の入試に失敗した者を中心に、不登校経験のある者、何らかの理由で全日制高校から転入してくる者、そして最近では外国籍の者も入学するようになってきている。それゆえ現在の入試制度では最底辺のレベルに位置づけられているといえる。生徒の男女比は約1:1である。大半の生徒が高校の存在する地域やその周辺から通学している。概して校則は一般の全日制に比べて緩やかである。筆者は、これらの特性をもったA高校で教えながら、参与観察・質問紙調査・聞き取り調査に協力を仰ぎ、校内誌等の資料も活用させていただいた。つぎに具体的な事例の検討にはいる前に、A高校における一般的な交友関係の特徴を把握しておこう。

## 2 A高校の交友関係の一般的特徴

〈表1〉からは、A高校の生徒の学校生活にとっていかに交友関係が重要な位置を占めているかが了解できよう。と同時にこの表からは直接わからないが、参与観察の結果、実は第2番目に位置する給食と交友関係が連

動していることがわかったのである。というのは毎日、食堂で提供される給食において一緒に食事をするグループが普段、学校でよく交流するグループであるからである。それゆえ、仲間関係の離合集散があった場合、それが直ちに給食時の座席位置にも影響するのである。このことは、筆者がある女生徒のグループにおこなったインタビューの中でも「でもj君やe君みたいに、給食とか1人で食べるのやじゃない?」「やだよね」「やっぱ、人間というのは1人じゃさびしいよ」(200c, 1)というかたちで言及されている。つまり、食事という最もくつろげると想定される時空間も、もし1人で食べなければいけない状況になった場合、生徒たちにとって落ち着けない、脅迫的な時空間に変貌する可能性があるのである。それゆえ、先の〈表1〉の友達とのつきあいが学校での楽しみのトップに来るとする場合の「楽しみ」の意味も、より限定的に考えねばなるまい。

そこでつぎに交友規模を示した〈表2〉を見てみよう。これは、2カ年度にわたって2年生(本稿で扱う2つのグループのメンバーの大半は表中の200c年1月のデータに含まれる)を対象に尋ねたものの一部である。ここで特徴的なのは、第1に各年度の最大値の属する階級でもわかるように、平均して男子の交友人数よりも女子のそれの方が規模が大きいこと、第2に友人がいないと答えたものが男子のみで女子には皆無なこと、また男子には「不定」と答えたものが存在するのに、女子にはそれが2カ年度を通じてわずかに1名と少ないこと、第3に女子の方がグループ内に「嫌なこと」や「喧嘩」などの不安定要因を抱え込みやすいということである。これらのことから、少なくとも女子にとって友人グループに属することが学校生活上、不可欠な課題であるものの、その仲間関係には不安定要因を抱え込みやすいという状況を見て取れる。そこでこれだけの交友関係の一般的特徴を念頭において、次に具体的な事例で女子における交友関係を通してのアイデンティティ形成という課題を追求してみよう。

これから取り上げるのは、グループBとグループCという2つの交友グループに関する事例である。Bは、女子グループで1年次(200a年度)

に自生的に成立し、3年次現在までそのメンバーの固定制が強いのに対し、Cは男女混合グループで、200c年度の生徒会という学校組織において学年縦断的に集まった生徒たちが母胎となって、現在メンバーも少しずつ拡張している。またグループに多少とも違和感を覚えるという意味でのグループ内周縁者はB、Cとも女子で、それぞれ5人、2人である。しかし両者は全く異なる志向性をみせる。つまり同じ周縁者という位置から出発しながら、Bのそれが、グループに違和感を覚えながら、最後は5人のうち3人までがいずれも「学校がおもしろくない」という趣旨の言葉を残して中退（中退時期はそれぞれ異なるが）していったのに対し、Cのそれは、

〈表1〉Q. 学校生活で何が楽しいですか？

(N = 78, 男39人, 女39人) 複数回答可

項目	人数	%	友達とのつきあい	53	24.3
国語の授業	6	2.8	先生とのつきあい	12	5.5
数学の授業	8	3.7	ホームルーム	4	1.8
理科の授業	2	0.9	運動会	25	11.5
社会の授業	2	0.9	文化祭	21	9.6
英語の授業	6	2.8	読書時間	5	2.3
商業の授業	13	6	その他	6	2.8
体育の授業	20	9.2	楽しみなし	9	4.1
給食	26	11.9	延べ人数	218	100

小数第2位四捨五入 (200a. 10実施)

〈表2〉学校内交友人数(2年生)と不安定要因: 単位は「人」

		2人	3~5人	6~9人	10人以上	不定	いない	嫌なこと	喧嘩
男	200c. 1	5	2	0	0	1	3	2	2
	200c. 10	0	3	1	1	4	3	2	2
女	200c. 1	1	2	9	3	0	0	5	10
	200c. 10	2	6	3	0	1	0	6	4

200c. 1 (N=26, 男11人, 女15人) 200c. 10 (N=24, 男12人, 女12人)

グループ内のメンバーとのより一層のコミュニケーションをはかることを通じて、生徒会以外の日常場面でも交流を深めていったからである。このような対照的な方向をとらせた要因とは何であるのか、それを学校という場が彼女たち周縁者のアイデンティティ形成にもつ意味という面から探ってみたい。

### 3 事例1 グループBについて

このグループは先述の通り、8人の女生徒からなる。そのグループ構造を周縁者yやkへのインタビューから整理すると、中心部分にyやkが「テンションが高くてついていけない」となげく、いわゆる声高に騒ぎあう3人の女生徒a, b, c (3人とも学校外に「彼氏」がいる)がおり、そのまわりをs, k, m, y, hの周縁者5人が取り囲んでいるという構図であることがわかる。このグループでも喧嘩がよくあるらしく、周縁者の口からそのいきさつが語られることがある。たとえばインタビュー(200c, 1)でyは次のように語っている。「あれは私がみんなと話さなくなったから、ケンカ状態になったの。私信じていたのに私のいないところで、悪口言われたし。(学校を)やめようかと思って、ちょっとそういたら、『じゃ、やめれば』とかいわれてよけい。(数秒後)女の子ってよくキレルよ」。さらにyがみんなと話さなくなった原因を尋ねると「私、しばらく休んでたじゃない(母親の交通事故で数週間)、だから、あとから入りづらくなっちゃって」(下線部は引用者、以下同様)と述べている。このようにグループに対する居心地の悪さを感じたyのその後のコミュニケーションスタイルはどのように変化したのだろうか？

「たとえば、ほら、よく給食の時とか、私が大きな声で話しても流されることあったの。だから、今ではみんなが彼氏の話をしている時なんか、私、聞いてる振りして『ああ、そうなんだ』とか、いうことにしてんの。(中略)でもケンカ状態になって、みんなで話し合ったあと、しばらくし

て、みんなが私のこと心配してくれてたんだとわかったの。で、1人の人がまた友だちになろうって言ってくれたの」と周囲に合わせることで、最後は仲直りに至るように見える。しかしyの、メンバーに対する不信感はぬぐえず、「疑いながら、信じようって。だって疑ってばかりいちゃいけないと思って」と今後、一步距離をとる姿勢が明らかである。ここで注目すべき点は、第1に喧嘩の原因とその結末であり、第2にそこから浮かび上がるグループ内のコミュニケーションの特徴である。順にそれらを検討してみよう。

### (1) 喧嘩の原因と結末

上記の引用で特徴的なのは、喧嘩の原因が直接にはyが他のメンバーと話さなくなったことだけのように見える。しかし、よく見るとそのような事態に至らせた今1つの原因は「私信じていたのに私のいないところで、悪口言われたし」のごとく、yの信頼していたメンバーの誰かが陰口というかたちでyの悪口をグループ内の他のメンバーに語ったことであることがわかるのである。これと同様な訴えは他の周縁者からも、たとえば「でも女の子って裏切りが結構あって」(200b, 3のhの発言)などというかたちで聞くことができた。これらのことはこのグループ内のメンバー相互に確実に不信感を醸成し、やがてはグループの解体を導きかねない働きをするはずである。しかし、そうはならず、グループが存続しうるのはメンバー全員が集まってグループ離脱をしそうなyに「心配してくれてたんだ」と感じさせる、「思いやり」を示したからである。しかしこの「思いやり」をもってしてもyの不信感はぬぐえない状態になっていることも明らかである。つまり、このグループは周縁者の多くが語るように不信感が醸成しやすい構造を持っているといえる。しかしそのような構造を持ったコミュニケーションとはいったいどんなものなのであろうか？

## (2) グループBのコミュニケーション構造の特性

上記の引用ですぐ気づくのは、yが数週間休んだ後ではグループ内のメンバーの話についていけなくなっていると語っていることである。その状態を説明したyの語りで特徴的なのは、「流される」という言い回しである。つまり、この場合、給食時に彼氏もちで「テンションが高い」a、b、cが彼氏の話というセクシャルな話題に興じているときに、その話題に沿わない内容を語っても無視されてしまうのである。それゆえ、yは何とかその場を取り繕うために「聞いてる振り」という行動、いわば「合わせ」行動をとったものと考えられる。

このような構造を別な周縁者mは、より鮮明なかたちで表明している(200a, 12)。普段、グループ内で何かを決めたりするときの話し合いや議論はないのかと聞いた筆者の問いに対し、mは「そういうことすると、みんながズバーというから手が出ちゃう(暴力の意:引用者)。(中略)話し合いもムカツクから話す。いやなことがあったらズバーといって逃げたり」「話すときもあるけど、流される」とyと同様、グループ内のコミュニケーションの一方方向性を指摘している。さらにこのようなコミュニケーション構造への対応として、mは携帯電話のメール機能で「普段、いつも話さないこと」を一方向的に送信するのだという。この理由としてmがあげたのが「メールでやったら、返ってこなくてもショックじゃないし」ということであった。mが敢えてこのような迂回路をとるのも、普段の対面的なコミュニケーションにおいて上記の「流される」に象徴されるような一方方向性とその方向性(それは往々にして上記の引用のごとく、セクシャリティを伴ったものである)を決定するという意味での権力性が胚胎しているからである。しかもこのとき、その権力を握っているのはグループの中心にいる女生徒たちであるのもあきらかであろう。つまり、中心部の生徒は「流す」という操作を通じて話題をコントロールするとともに、グループを離脱しそうな者には「思いやり」を示すことで権力性を維持しているともいえるのである。またこの際、後者の操作は中心部の生徒にと

っても、グループ解体が自己の孤立化を意味することを却って浮彫りにしているといえよう。mはこのような事態に対し、それを学校外の交友関係と比較しながら「学校だとすごい気を使って」と表現した。

ここにはやはり2節で予想したように学校でのグループ内コミュニケーションが脅迫性（ここでは「流される」に代表される）を秘めており、それゆえに特に周縁部の生徒は「合わせる」行動＝自己抑制的な行動に終始せざるを得ない状況が浮かび上がってくる。レインはこの間の事情を、アイデンティティ形成にとって他者との関係性が必要不可欠であると述べる一方（Laing 訳書 1975, 94頁）、「自分が他者に全く認めてもらえない場合、そしてまた、自分が誰にも何の変化も与えることができないと感ずる場合、空虚感や無益感が生じうる」（同書 96頁）と指摘している。つまり、「どこかに属していたい自己（＝「やっぱ、人間というのは1人じゃさびしいよ」という孤立への恐れ）」と「傷つきたくない自己（＝「流される」ことへの恐れ）」とのジレンマを解決するための方略として編み出された「合わせる」という自己抑制的な行動が却って空虚感や無益感を生み出す可能性を開いてしまうという逆説をここに見ることができるのである。それではこのような他者との関係性を築くことの困難に直面した周縁者たちはどこで、どのようにして自らのアイデンティティ形成の補償を得ているのであろうか？ 次にそれを検討しよう。

### (3) 周縁者のアイデンティティ形成

この問題を考えるための手がかりは上記yの引用文中の「女の子ってよくキレルよ」という言い回しである。このような女の子を総体として捉え、しかもそれがネガティブな意味構成になっている言説（以後これを「女の子言説」と呼ぶ）は、このyのほかにh（「でも女の子って裏切りが結構あって」）やk（「でも私、女の子のマンガは読まない」：これはグループ内の話題に関して聞いたときに発言された）、そして次に紹介する全日制から転入してきて、旧来の（全日制、定時制の双方を含む）グループ

に違和感を持つ女生徒からも聞くことができた。最後の女生徒は次のように語っている。「ほら、女の子ってトイレもみんなと一緒にとか、そういうのあるでしょ。私、ああいうのダメで。ほら、男の人のことはわからないけど、世間一般に女はねちねち、ぐじゃぐじゃしてらるっていうじゃない。自分一人で行けばいいじゃないと思っているうちに、なんか、学校が面白くなって、いかなくなっちゃたの」。

これらの例で特徴的なのはいずれの生徒も自分の属していた、ないしは現に属しているグループを批判するのにグループメンバーの個々を批判するよりも、女の子言説を利用して、つまりジェンダー・バイアスをかけて、女の子一般の「女性性」を仮構しながら、それを批判している点である。つまり各人は各人なりに、世間に流通している言説や自らの体験を織り交ぜながら作り出した女の子言説を武器にグループ批判を展開しているのである。しかもそれがグループ内の裏切りや同調圧力への批判、換言すれば脅迫的なコミュニケーション空間への批判というかたちをとっているのが特徴的である。これは同時に新たな対抗アイデンティティを模索している姿ともいえよう。

しかしここで注意しなければいけないのは、この女の子言説の利用が自己言及になる恐れがあることである。つまりそれを利用する本人をも、その言説は射程内に置く可能性があるということである。というのも所属するグループ内のコミュニケーション構造を改変できない場合、常に彼女たちが嫌う行為や価値等に関する規範への同調圧力にさらされるからである。それではグループを完全には離脱できないグループBの周縁者たちはこのような事態に対し、どのような対応をみせているだろうか？

ここで特徴的なのは、sを除いた周縁者4人全員とも学校外での音楽とのかかわりが学校生活を何とか続けさせてくれていると表明している事実である。h, y, kはいわゆるビジュアル系のロックバンドに強く惹かれているし、またmは様々な年齢層の男女からなるバンドのドラマーを担当している。そこではどのようなアイデンティティの形成が行われているの

であろうか？ ここではA高校の女生徒の中でもファンが多くいる、ビジュアル系のロックバンド（女生徒によって好きなバンドはまちまちである）のケースを取り上げてみよう。

hは中学時代にいじめを受けていたとき、支えてくれた友だちの好きだった「GLAY」の曲に接するようになる。その曲の良かった点について「詞。それを聴いて何か生きる勇気が出たっていうか。それにラジオでも『みんな、がんばれよ』とかいってくれるのでよけい好きになって」（200b, 3以下同様）と答えている。そこでさらにGLAYのメンバーとファンとのコミュニケーションスタイルを尋ねると「でも投書とかで、悩みに答えるというか」とラジオ等のメディアを通したものとライブの2通りであることが明らかとなった。後者のライブについてhは「『ああ、1人じゃないんだ』という感じ。『みんな仲間なんだ』と」と、ファン仲間との一体感を強調している。hは学校生活の困難に出会った時は必ずこのGLAYの曲を聴いているという。同様にyやkも別なロックバンドRaphaelのメンバーで急死した華月について校内誌に記事（200b, 3）を寄せている。その一部を引用してみよう。

y：「この時、私はいろいろと悩んでいて、友達との仲や恋愛などで嫌なことばかり重なって、学校をやめたいと思うようになっていた。（中略）ラジオを聞いたり雑誌を読んだりして、いろいろな思いが伝わってきて、高校をやめたいなんて馬鹿なことは考えちゃいけないんだ、何よりも自分のためにがんばっていかなくちゃと思うようになった。（中略）何よりも華月が私達ファンに残してくれた癒しの旋律」。

k：「『華月』の歌や詩には人を励ます力がある。本当がある。それに何度も助けられた。学校を辞めたいと思った時期も「華月」に助けてもらった」。

このように周縁者の生徒たちにとってこれらのロッカーは単なる歌手の

位置にとどまるのではない。それは彼女たちを勇気づけたり、癒したり、励ましたりすることによって学校を続けさせる力さえ持っているのである。つまり自己への確信という意味でのアイデンティティ形成に必要な不可欠な力になっているのである。この力はどこから来るのであろうか？

kは上記の記事の2年後(200d, 3)に同じ校内誌で次のように述べている(kは上記の華月の死後, Raphaelを知る以前から好きだったというバンドのPIERROTのライブによく行くようになる。そのライブに関する記事である——引用者注)。「LIVEは現実逃避できる場所であり、自分の存在を認めてくれる場所である。(中略)他人同士が同じ物を見て感動し、同じことをする一体感が良いのだ。あとヴォーカルのキリトは言葉をくれます。自分の存在が希薄になり、消えてしまいたくなかった時に、彼の言葉を思い出すと元気になるし、生きようと思う」として、kはキリトのライブでの言葉を収録した雑誌から、その一部を引用している。

「親や友達や周りの人から、誰からも必要とされなくなって、(中略)“本当に死んでしまおう”なんて思う時も来るかもしれません。だけどね、そういう時こそ俺の言ったことを思い出せよ。誰からも必要とされなかったとしても、俺たちだけは、俺たちの音楽を愛してくれるお前たちを必要としている。いつだってお前たちが会いに来てくれるのをどんな状況だろうと待ち焦がれています」。

上記の諸引用文の下線部をを比較すると、先のGLAYもRaphaelも、そして最後のPIERROTも実は周縁者たちのアイデンティティ形成にとって、共通の特徴を持っていることがわかる。それは第1に最後の引用文に明確なように、好きなメンバーによる、周縁者たちそれぞれの存在の承認である。そのことが先の勇気や励ましにつながっている。第2にライブという場が積極的な同調行為によって他のファンとの一体感を醸成しやすい場であることがあげられる。第3にバンド自体がライブに限らず、ラジオ等を通してファンからの投書に対し、直接メンバーが語りかけるという「声」というメディアの積極的な活用によって、フィードバックをおこな

っていることである。ここには、不特定多数のファンを一つのファンによる感情共同体ともいべき「想像の共同体」(Anderson 訳書 1987)にまとめ上げようとする営為をみることができる。このようにロックバンドは、ファンの「存在」の承認→ファン間の仲間意識の醸成→ファンという「想像の共同体」の形成というヒエラルヒーを作り出しながら、ファンのアイデンティティの形成とその安定化に大きな力をもっていることがわかる。

しかし、この際注意しなければならないのは、やはりこの「想像の共同体」におけるコミュニケーション構造の特徴である。それはコミュニケーションがロッカーとファン、そしてファン同士も他人同士であるという匿名性の空間でなされるということにかかわる。第1に指摘できるのは、ロッカーとファンとの関係である。そこでのコミュニケーションはライブやラジオ等での交流というかたちを取ろうとも、ロッカーがファンの個々を直接見知った上でのやりとりではない以上、先の「存在」承認もマスとしてのファン一般になされる抽象性、仮想性の強いものにならざるを得ない点があげられる。第2に指摘できるのが、ファン同士の関係性である。先のkも述べていたように、たとえばライブでのファン同士の仲間意識は「他人同士が同じ物を見て感動し、同じことをする一体感が良いのだ」のように、個々人の差異を認め合うという関係性よりも同じことをする一体感に基礎をおいている点である。それを媒介しているのがロッカーだとすれば、この時ロッカーはファン個々人の差異を消去し、その同質性を前面に押し出す機能を果たしていることがわかるのである。つまり先のファン同士の一体感とは、実はファン個々人がロッカーを経由して、もう一人の自分をそこに発見しているにすぎないということになる。このような事態が日常空間では起こりえない以上、やはりこの関係性も仮想的なものというであろう。もちろん、そこから出発して友人関係を築くケースもあるだろう。

以上、ビジュアル系のロックバンドが周縁者たちのアイデンティティ形

成にいかに関わっているかを見てきた。一見、周縁者たちは女の子言説を使うことで学校内のグループという、不本意な同調を強いるという意味での脅迫空間から離脱し、新たなアイデンティティ形成の場を見出したようにみえる。しかしその行きつく先は、ファンとしての積極的な同調による「想像の共同体」という仮想空間であり、感情的な融合感を基調とする慰めや癒しの場であった。彼女たちはその慰めや癒しの力によって学校空間に戻ってくるのだが、現実の学校世界では女の子言説に表明された葛藤は未処理の状態で放置されたままである。つまり彼女たちは、いずれの空間にいても他者との差異を前提としたコミュニケーションを欠いているために、自己を見いだし難い状況に置かれていることがわかるのである。彼女たちのアイデンティティ形成作業は大きな困難に直面しているといえる。

#### 4 事例2 グループCについて

すでに2節でも述べたように、ここでの周縁者は女子2人のdとwである。といってもここで主に対象とするのは、その内の生徒会長になった1人の女生徒dである。wや他のメンバーは、dとの関係性のなかで間接的に言及される。ところでこのdとwは共に不登校歴を持ち、A高校の1年次に知り合って以来の友人同士である。dは、小学校低学年以来不登校で、フリースクールに通った経験を持つ。1～2年次にはd、w共に学校を休みがちだったために、dが1回の留年、wは2回の留年のために、学年はdの方が1年上である。200c年度の生徒会でもd(4年生)が生徒会長と、w(3年生)が副会長に立候補し、当選以来生徒会の仕事は精力的にこなしてきた。そもそもdとwが立候補した動機はdによれば「卒業生の中に、元同じ学年ということもあり、交流の深い友人が多いので、私と友人が会長と副会長として、卒業を見送ってあげたいという事」(校内誌(200d, 3))である。しかしdは後述するA高校の入学当初と同様、生徒会参加時も「まわりから最初は近寄りたいたいと感じられていた」と後

に述懐している。本節ではこの年度の生徒会の、学年縦断的な男女混合メンバー総勢 12 人（男 6 人，女 6 人）をグループ C と名付け，d とそのメンバーとの関係性のなかで d のアイデンティティ形成がどのようなかたちでなされているかを検討したい。

扱う対象は，主に遠足（200c，9 実施）という学校行事の企画・決定過程である。これを対象としたのも実はこの行事が d の発案であり，しかもそれが A 高校で初めて企画されたものであるからである。それゆえ，その企画・決定過程における d とメンバー間に予想される，コミュニケーション上の葛藤や同調が d のアイデンティティ形成にいかなる影響を与えているかをより顕在的に把握しようと考えたからである。そこでまず，その前提として d の学校観や交友観をインタビュー（200c，2）から提示してみよう。

d は既成の学校については「学校って 1 つの集団っていうか，1 つの社会じゃないですか。だから，つきあいが薄く，広くっていうか，そういう感じになりますよね」と答え，さらにその交友観について聞くと「せまくっても深い方が，フリースクールの子なんかは結構，自己主張する子が多いし，わかりあえたという感じがしたんで」とフリースクール時の交友関係を 1 つのモデルにしている。そのような交友観をもつ d にとって A 高校でのそれは「私，周りから，取っつきにくいとか思われてるらしいんですよ。でも w さんはあちらの方から話しかけてくれて，それからずーと友達なんです」のごとく，とまどいの連続であり，同じ不登校歴をもつ w との出会いが彼女の A 高校での位置取りに貢献したといえる。

d は 200c 年 7 月のインタビューにおいても学校の集団性や協調性の重視に触れつつ，「学校って 1 人 1 人を見るんじゃないで規則で見る傾向ってあると思うんです（中略）それはちょっと違うと」「集団生活しているから，なんか見ると，この学校でもそうですけど，合わせて動いている子が多いなと思うんですよ。流されるというか，そういう子が多いなと思って」などと語っている。

つまり d にとって既存の学校が A 高校を含めて規則をてこにして集団性や協調性を強調するあまり、そのメンバーたる生徒個々人の関係性は却って希薄になり、その同調性（「合わせる」「流される」）のみが前面に出ていると主張しているのである。それに対して d は、フリースクールでの人間関係や環境について次のように述べている。前者に関しては「わかりあえた」と肯定的に表現し、その原動力を生徒それぞれの「自己主張」にみている。それを d は同じインタビューで「ネガティブな子が少なかったんです。私、学校くだらないからやめたとか、そういう前向きというか、しっかりした考え方もってやめた子が多かったんです」と語っている。また後者に関しても d のフリースクールには規則が基本的には存在しないことから、「(行動を) 起こすのは自分次第なので、ほとんど何するとかいうことは本人が動かなければ何もいわないし、何もしない」と、その自発性の重視の環境を指摘している。

上述のようなフリースクールの学校文化を身につけた d にとって、次のような言葉は彼女の立場を端的に表現しているといえよう。「基本的に本人がまじめにきちんとしてれば問題ないと思うんで、見た目<sup>(3)</sup>とかは別にいいんじゃないかって」。つまり、外見よりもその人が何を考え、どう行動するかが重要だという個人主義的な考え方である。それでは、このような考え方もつ d にとって生徒会での他のメンバーとの交流はどのような特徴をもち、そのプロセスの中で d のアイデンティティ形成はどのようにおこなわれたのだろうか？

#### ① d のアイデンティティ形成 (1)——生徒会での話し合いを中心に——

d は既述のごとく、生徒会への参加当初もとまどいを感じていたらしい。しかも生徒会のメンバーのうち 12 人中 8 人が 3 年生で占められており、「むこうはほとんど知り合いで (中略) こちらは初めてだったんでコミュニケーションとれなくて」とか、d が話し始めても「それでも仲間内で騒いで聞こえてなかったり、聞いてなかったりで、それでどうやって進め

ていこうかと思って」と、コミュニケーションをとるための前提としての、他のメンバーとの関係性の構築の困難を指摘している。

このようなdのとまどいを助けたのがdによれば3年生ながら、年配のp(男, 30代)である。彼はdが話そうとするときに、周りのメンバーがうるさいと「うるさいよ」と注意してくれたという。このような援助に支えられながら、dは生徒会の前後に、日頃うるさいメンバー1人1人に「みんなでやってくもんだから、ああいう場では話聞こうよ」という趣旨のことをぶつけていった。その結果、それらのメンバーも次の回から、話を聞くようになったという。このような一連の過程を通してdは「1対1で話し合った方が仲良くなれるし、ちゃんと聞いてくれる。(中略)コミュニケーションって大事だと思います」と語っている。

ここにはpの側面援助があったとはいえ、フリースクールで身につけた「せまくても深い」関係の中で、「自己主張」を基礎にわかりあおうとするコミュニケーション手法を見てとることができる。dはまさに生徒会という場でもそれを実践することでその手法の正しさを確信するとともに、自らの生徒会内での位置取りに一定程度成功したといえるだろう。その意味でdのグループ内でのアイデンティティ形成は一步を踏み出したといえる。しかしそのような実践がこの後、何の障害もなく遂行されたわけではない。

## ②dのアイデンティティ形成(2)——遠足の企画・決定過程を中心に——

最大の確執は3年の女生徒メンバーqとの間に起こった。それは、200c年9月に実施される遠足の企画・決定過程でのことである。もともとの行事はdの発案であり、A高校では初めての試みである。筆者はdとqが喧嘩状態になったということを生徒会の他のメンバーから聞いてはいた。しかし、当事者の口から事の経緯を聞くことができたのは同年12月のことである。そのときqが述べた不満は2点に集約できる。第1は「でもdのあのいい方がいいや。人間としていや。あの人、1年の時から

いやだった。周りの人も『あいつ、偉そうじゃん』とか、「いったよ」のごとく、まさに d が日頃「見た目」や「取っつきにくさ」ということで表現していたことがらに関わる。第 2 は q が提案した案がそれまで何度か他のメンバーから却下されたのに d の案が採用された事があったため、d 主導で生徒会運営がなされてるように q には思えた点である。たとえば「この前の文化祭のテーマ決めるときも結局、Peaceful World に決まっちゃったでしょ。私、その場にいたのよ。私は Love and Peace がいいと思ってたの。d が Peaceful World でどうって、絵まで描いてきたの。みんな『それでいこう』ということになって決まっちゃったの。」「遠足のこと決めるときもそうだったの。私、U 動物園とか、X 園とか考えてたの。そしたら d に『それならインターネットとかで行きたい場所調べてみた?』とかいわれちゃったの」のごとくである。

この 2 つの引用文を見ても明らかなのは d と q の自己主張のありかたの相違である。d は、自らの主張を補強したり明確化するために、絵やインターネットという手段を駆使して<sup>(4)</sup>メンバーを説得しようとしているのに対し、q はただ思いついた案を控えめに発言するというように、説得性にかける点である。

このような q の姿勢は遠足当日の先発隊のメンバーを決める際にも別なたちで現れる。当初、生徒会では先発隊として 2 つの条件を考えたという。q によれば「1 つはシュミレーションに行った子、地理がわからないと困るでしょ、もう 1 つはいろいろな道具を持っていくので男の子が必要ということだったの。そしたら d が『私と w と誰か男の子行ってくれるかしら?』っていうの。私も z も一緒に先発隊で行きたかったのにさ」となる。その後、メンバーに関する再検討の「話し合い」が行われ、q も z も先発隊に加わるのだが、その先発隊に加わりたかった理由を q は次のように説明している。「だって男の子起こさなくっちゃと思って、(中略)だって、あの人たち朝に弱くって。g なんてシュミレーションに遅れたんだよ」。

ここでdも従来の、道具を持っていく人=力仕事する人=男の子という性別役割図式に一定程度とらわれているとはいえ、qはさらにそれを一歩進めて、最後の下線部のように男の子の身の回りを世話しようという、旧来、女性に割り当てられてきた性別規範を積極的に受け入れようとしている点である。これはdが身につけた自ら考えて発言したり、行動したりすることから成り立つ自発性の文化、自己責任の文化であるフリースクールの学校文化とは大いに異なる。

以上の2点にわたるqの不満はqとdが身につけたジェンダーに関する文化差異として理解することが可能であろう。すなわち、公的な話し合いの領域では明確にものをいわず（ないしはその手法を持たず）、私的な領域で男の子を支えるというqの文化と、服装や態度などの見た目で人を判断するのではなく、公私の領域にわたってその人の主張を重視する個人主義的なdの文化である。この2つの文化の対立・葛藤の中でdが見いだしたのは一体どんな方策だったのだろうか？

dは卒業時の校内誌（200d, 3）に次のように述べている。「やはり生徒会長とは、生徒の代表であり、また、生徒会の中でも、リーダーシップをとって、会議の中でも皆の意見を聞き、まとめていくものである」。つまり、dが見いだしたのは一見単純ながら、集団内で様々な意見を出し合い、「話し合い」で物事を決めていく態度である。これはdの身につけたフリースクールの文化には希薄なものだっただけに、上記のqをはじめとするメンバーとの対立、葛藤はdのアイデンティティに様々な異質性を刻印したといえるだろう。と同時にそれらの異質性を束ねて何かを生み出すという経験はdに充実感を与えるとともに、dのグループ内での存在感を確固なものとしたといえる。実際、他のメンバーからも、対立にめげず、結局は1つの行事をまとめ上げていくdの姿勢は、最後には肯定的に評価されることになる<sup>(5)</sup>。メンバーのうち1年生のある男子は、生徒会がうまく機能している理由について尋ねると「決断の積み重ね、それに楽しいからね」（200d, 3）と答えている。このように上意下達や馴れ合いでなく、

意見を出しあって話し合いで物事を決めていくという、新たな文化はこのような生徒会という学校組織からも発現しうることをこの例は示している。dは卒業後も、他の生徒会のメンバーと、学校外で交流を続けている。

## まとめ

以上、グループ内の周縁者に注目しながら、2つの事例を検討した。ここで明らかになったのは次の点である。

事例1の女子だけからなるグループは一見、そのメンバーの固定性が強く、安定しているように見える。しかしひとたび周縁者に目を向けてみると、そこが彼女たちに不本意な同調を強いるという意味での脅迫空間であることが明らかになる。そこで彼女たちは、一方で「どこかに属していたい自己」と「傷つきたくない自己」とのジレンマを解決するため、「合わせる」という自己抑制的な行動をとりながらグループに帰属しつつ、他方で従来の女生徒の行為規範を批判する女の子言説を使うことで学校内のグループから離脱し、新たなアイデンティティ形成の場をロックバンドなどに見出そうとする。しかしそこは、感情的な融合感を基調とする慰めや癒しの場にすぎず、その行きつく先はファンとしての積極的な同調による「想像の共同体」という仮想空間であり、現実の学校世界での葛藤は未処理のままである。つまり彼女たちは、いずれの空間にいても他者との差異を前提としたコミュニケーションを欠いているために、自己を見いだし難い状況＝アイデンティティ形成の困難な状況に置かれていることがわかるのである。

それに対して事例2の生徒会を舞台とするグループにおいては、事情が大いに異なる。ここでの周縁者は、不登校歴のある女生徒である。彼女は、生徒会長として、自発性や自己主張を基調とするフリースクールで身につけた、個人主義的な学校文化を生徒会に持ち込むことで、他のメンバーとの対立・葛藤を惹起する。しかもその対立の最大のもは、公的な話し合

いの領域では明確にものをいわず（ないしはその手法を持たず）、私的な領域で男の子を支えるということを基調とする女生徒のもつジェンダー・バイアスに彩られた文化とのそれである。しかしその対立をおそれず、深さを求めるコミュニケーションへの志向性と自らの主張に説得力を与える手法によって、彼女は徐々に他のメンバーの信頼感を得ていく。と同時に、この女生徒自身も従来とは違って、集団のメンバーの様々な異質性に直面しながら、それらを束ねることで何かを生み出すという新たなコミュニケーションパターンを獲得することになる。これらのことを通して彼女は自らのアイデンティティ形成を果たし、グループ内での位置を確固としたものにしていったのである。

これらの2つの対照的な周縁者の動向は、学校という場で対立を恐れず意見を戦わすなかで、様々な異質性に出会うことや自らの主張に説得力を与える手法を育むことが、生徒個人人のアイデンティティ形成にとっていかに重要であるかを示唆している。

#### 注

- (1) 教育関係の雑誌だけに限ってみてもその事態は了解できる。たとえば1990年代に子どもたちの「居場所」関係で特集を組んだもののうち、いくつかのタイトルをあげると次のようになる。「子どもの居場所づくり」（「教育」1993）、「登校拒否の理解と支援—登校拒否の予防のために」（「児童心理」1994）、「子育てネットワークと「居場所」づくり」（「月刊社会教育」1998）など。また行政系でも「登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して」（文部省1992）などがあげられる。
- (2) たとえば石川（1992）ではこれを「「わたし」とはアイデンティティの集合、アイデンティティの束だということだ」（14頁）と表現し、人にとってこのアイデンティティ管理＝存在証明が重要な課題であることが述べられている。
- (3) d はよくこの語を使う。その度に意味の力点は異なるとはいえ、その中核的意味は総じて服装・態度などを通して、自己が他者に与える自己イメー

ジの意味に使用している。

- (4) 実は d にフリースクールでの学習形態について尋ねた際、彼女は次のように発言している。「自分の事だから、ああいうことやするにはこうしようとか、情報ってすごくあふれてるから、パソコンでもいいから、本でもいいし調べてみるって大事だと思いました」(200c, 7)。つまり、この手法もフリースクールで身につけたことがわかるのである。
- (5) 200c 年 12 月に d の生徒会への取り組みへの評価を生徒会の 8 人のメンバーから聞くことができた。それによると 8 人中 7 人までが「よくやった」と好意的に評価している。

## 文献

- Anderson, Benedict 1983, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso (=1987, 白石隆他訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』リプロポート)
- Hall, Stuart 1996, "Who Needs Identity?," in *Questions of Cultural Identity*, ed. S. Hall, Sage Publications (=2001, 宇波彰監訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』大村書店, 7-35 頁)
- 石川 准 1992, 『アイデンティティ・ゲーム——存在証明の社会学』新評論
- Laing, R. D 1961, *Self and Others*, Tavistock, (=1975, 笠原嘉他訳『自己と他者』みすず書房)
- 宮崎あゆみ 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス——女子高校におけるエスノグラフィーをもとに——」『教育社会学研究』第 52 集, 157-177 頁
- 1998, 「ジェンダー・サブカルチャー——研究者の枠組みから生徒の視点へ」志水宏吉編『教育のエスノグラフィー——学校現場のいま』嵯峨野書院, 275-301 頁
- 上間陽子 2002, 「現代女子高校生のアイデンティティ形成」『教育学研究』第 69 巻第 3 号, 367-378 頁